

空間を越えろ！！学校間をオンラインでつないだ未来の俳句学習

埼玉県立松山高等学校 教諭 浅見 和寿, 教諭 板谷 大介, 教諭 松永 千希, 教諭 多田 裕亮
 教諭 黒澤 佑輔, 教諭 小島 大貴, 教諭 高橋 大樹
 キーワード：高校国語、俳句、Google ハングアウト、協調学習、5G

実践の概要

学校間をインターネットでつなぎ、様々な背景をもった生徒と協調学習（知識構成型ジグソー法）を通じて授業を行う。そこで情報を共有し、リアルタイムで対話する中で、俳句の魅力について深く考察する。

1. 目的・目標

(1) 授業のねらい

松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句を学習し、「俳句の魅力はどのようなところにあるか」を考察する。その際、自校の生徒だけでは、同じような環境・学力・性別であるため、俳句の捉え方が画一的になってしまうのではないかと考えた。そのため、ICT (Google ハングアウト) を活用し学校間をつなぎ、同じ俳句の授業を他校の生徒とリアルタイムで行うこととした。

(2) 単元の目標

- ① 俳句の魅力について、様々な意見をもとに考察すること。
- ② 学校の枠を超えた生徒同士の対話の意義を生徒が自覚すること。
- ③ 次期学習指導要領も踏まえ、正しいインターネットの活用方法を理解すること。

2. 実践内容

2.1 インターネットを駆使した情報収集（各学校）

今回の授業は、ICT を活用し地域・学力・性別・生育環境等異なった生徒同士が話し合いを行うことで、俳句の魅力を多角的に考察することを目的とした。また次期学習指導要領を見据え、情報の取り扱い、真偽の確認等

を意識させ、インターネットによる情報収集を行った。俳句三首を各担当校で割り振り、「作者・時代・季語・季節・切れ字・和歌の修辞とその効果・内容」等を把握させ、俳句の魅力を考察させた。とりあげた俳句は次の三首である。

A 古池や蛙飛びこむ水の音 松尾芭蕉

B 菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村

C やせ蛙まけるな一茶これにあり 小林一茶

その後、この情報を共有しながらオンライン授業を実施。

2.2 ハングアウトを使った協調学習（オンライン授業）

5G（第5世代移動通信システム）を見据えて、オンライン授業を展開した。物理的な距離を飛び越え、遠隔地同士で同じ授業を受ける。また話し合いもその場でできることから、隣にいるような感覚で、話し合いが可能となった。各学校によって、準備したものは若干異なるが、モニター、マイク、WEBカメラ、スピーカー等を利用し、Google ハングアウトを通して話し合いを行った（写真1）。



写真1 Google ハングアウトの様子

【本時の学習内容】

- 指導目標／他校の生徒と協力しながら、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句を学習し、課題である「俳句の魅力はどのようなところにあるか」を多角的に理解し、深く考察する。
- 評価／・三つの俳句をもとに、「俳句の魅力はどのようなところにあるか」について考察しようとしている。【関心・意欲・態度】
 - ・三つの俳句をもとに、俳句の魅力について考察し、それを言語化することが出来た。【読む能力】
 - ・芭蕉「古池や」の句、蕪村「菜の花や」の句、一茶「やせ蛙」の句、の内容を理解している。【知識・理解】
- 【指導略案】
- 単元指導計画（全体時間3時間）
 - (1) 課題に個人で論述し、担当俳句を調査（エキスパート）（1時間）
 - (2) 上記の間や担当俳句について、話し合い（ジグソー）（1時間）
 - (3) 再度課題について個人で考えさせ、論述させる（1時間）
- 本時の目標と展開 平成30年10・11月 各校合わせた生徒数20名「俳句の魅力はどのようなところにあるか」という点を、3つの俳句を通して情報を共有し、皆で考察していく。

学習活動	生徒活動	指導上の留意点
課題について個人で考察。担当俳句の「切れ字」「句切れ」「体言止め」等の修辞とその効果を理解する。	俳句の魅力について考察し、担当する俳句について調べる。	ICTの活用と情報リテラシーについても指導できるようにする。
課題への考察と、調べた事柄について、他校間で連携し、情報共有する。	Google ハングアウトを利用して、各学校を中継でつなぎ、対話する。	使用機器の環境の整備やファシリテーターとしてふるまう。
他校の生徒と情報を共有したことも踏まえつつ、課題について再度各自で取り組む。	授業を終えた後にワークシートに、各自の考察を記入していく。	時間配分や、質問等に応えられるように準備し、記述に十分な時間を取る。

普段男子生徒としか話し合いをしていない生徒たちであったが、他校の生徒（主に女子生徒）たちと話すということで緊張感を持って授業に参加していた。また、学校が異なるので、「この間の授業でやった A という作品にもあったように・・・」等、既有知識は共有されていないので、他校の生徒がわかるように言い換えをしながら説明している（写真2）。



写真2 ジェスチャーを入れながら説明している

女子校の生徒は、他校の生徒の発言を活かしながら、自身の意見を伝えるなど、傾聴しながら発言するという思いやりも見受けられた。また自然についても女性目線の意見もあり、様々な角度からの意見が飛び交った（写真3）。



写真3 他校の生徒の意見を引用し発言している

表1 生徒の授業前後の回答の変化

生徒	授業前	授業後
A校生徒	「なんの実験もない授業であるのに、その一つ一つが単に半分がよかろうか。無味を副産物とした素材なのであり、また割合の調整と、水の音の静けさや音が響くようである。（匿名） ・経済的な面も詰んでいて、葉の花と月の景色や風に揺れて東から西に揺らめく葉の花の様子が分かるようである。（匿名） ・「やせ」をつけることで難が存在であることがいっそうに感じ、まげらなと静無しているところに一茶が自分を健に反映していることがわかる。鳥獣戯画の一種のようである。（匿名）	「俳句の魅力というのは、今までぼけぼけといた俳句の存在に気づかされてきたが、今回の授業を通して、 <u>言葉の少ない中での表現の豊かさや、読者に表現の面白さを感じてもらいたいという点にもあるということが分りました。</u> 読まれた表現は実際に俳句であるのと同時に、ここで設定された文章とは違って、人によっていくでも解釈ができます。それは、 <u>同じ『今日のヴェニス』で主人公のように、その解釈は自由であり、そこが魅力です。想像力をかきたてる世界観を17年でも成り立たせるのはまさに驚異です。</u> また、これらの俳句は、 <u>文章でありながら自然に込められた表現を感じています。経済的、写実的な表現による情景への訴えや、静寂さによる読者への働きかけなど、また、一茶の自分の心を巧みに投影させる表現は、胸に響くものがあります。</u> さらに、 <u>自然を題材とした句が多いのですが、その中に『日本らしさが出ていて、あつたままの自然を表現する』ように、日本に誇れている楽しさや、あつたままの自然を表現する</u>
B校生徒	私が思う俳句の魅力は、五七五の少ない文の中に情景や作者のそのときの心情がつかわれている。それを読み解いていくと情景や心が感じられ、それが新鮮に感じられることだろう。	「俳句の魅力とは、17字の中に情景や心情を入れ込んで表現させる、 <u>読者に情景への想像力を持たせることへの面白さだと感じました。</u> また、外国の形式的なものとは違い、 <u>情景描写に込められた面白さを感じました。</u> <u>様々な情景があるから、様々な表現が生まれ、それが表現することによって俳句の魅力だと今回の授業で感じました。</u>
C校生徒	17字だけでしっかりと情景等が想像できる点。	Bの俳句の魅力としては作者が画家というもありその句の中に一枚の絵として見られる面白さを感じました。 Cの俳句の魅力としては <u>簡潔に自分の感情を表現して、それが読者に伝わるようにも感じられるように思いました。</u> <u>生徒としても改めて感じた点でも感じました。</u>

3. 成果

授業前と授業後における生徒の考えの変化はとて顕著であった。どの学校の生徒も、授業後の方が圧倒的に内容が深まっている。表1の下線の箇所は、オンライン授業中に他校の生徒が発言した内容になっており、このことから、他校の発言をしっかり受け止め、自分の言葉にしていることがわかった。また授業後のアンケートについても、「とてもたのしかった」「たのしかった」という生徒しかおらず、「このような進め方の授業をどのくらいやりたいですか」という質問に対しては、「結構やりたい」という生徒が多く、「やりたくない」という生徒は一人もいなかった。この授業後、他校の生徒から刺激を受け、授業のみならず学校行事にも積極的に取り組む等、学校生活が、良い方向に変化した生徒もいた（図1）。

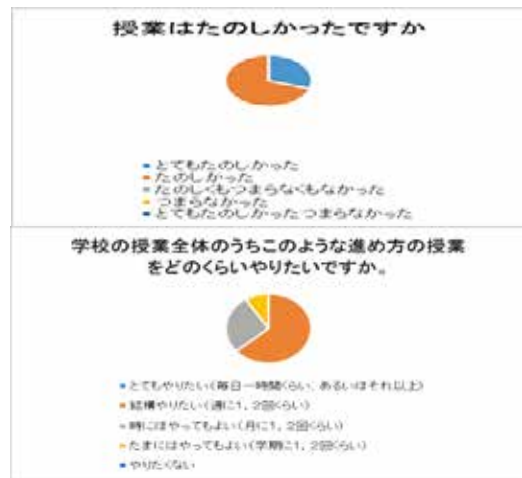


図1 アンケート結果

* 右のQRコードは、当日の授業における生徒の様子を、動画にまとめたものである。実際のやりとりがわかるようになっているので、ご覧いただけたら幸いである。



4. 今後に向けて

ICTを活用することで、学習の幅がどんどん広がっていきと感じている。私たち自身がどんどん新しいことをチャレンジしていくことで、生徒たちに良い影響をもたらすと考える。今後は、学習教材の動画化等を行い、その教材を他校の授業で用いたりできるようなものを作成していきたい。また、それを作成する際も、生徒と一緒にやることで、より学習効率が高くなると感じている。

5. 謝辞

本授業を実施するにあたり、東京大学 CoREFの方々をはじめ、埼玉県教育委員会、埼玉県総合教育センターの方々、本校含め7校の教員にご協力いただいた。厚く御礼を申し上げ、ここに感謝の意を表す。